

2 アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科の理念・教育目標

(A:大学院研究科の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成等の目的の適切性)

(B:大学院研究科の理念・目的とそれに伴う人材養成等の目的の達成状況)

【現状の説明】 1999年4月、聖学院大学人文学部欧米文化学科と聖学院大学総合研究所の「日本・アングロアメリカ研究センター」を基礎としたアメリカ・ヨーロッパ文化学研究科(以下、本章においては「文化研」という。)博士前期課程を設立した。2001年4月には博士後期課程を開設し、博士課程の前期・後期を通じて、当該分野の高度な専門的研究者を養成することを目指す強固な研究教育体制を確立した。

文化研の理念・目的と教育課程は、日本におけるこれまでのアメリカ文化研究あるいはヨーロッパ文化研究に対して明確な特色を持つものであるといえよう。それは、一言でいえば、グローバリゼーションの文脈の上でアメリカ・ヨーロッパの文化を深層から理解するという視点をもっていることである。21世紀に入り、世界ではEUの成立と共通通貨ユーロの誕生にみられるように、国民・国家を越えた新しい動向、グローバリゼーションが台頭している。それは経済の領域にとどまらず文化をも変容させ、新しい文化を生み出していくであろう。この大きな潮流を生み出しているのはいうまでもなくアメリカとヨーロッパ諸国とその文化である。いまこそ日本はアメリカとヨーロッパの文化を深層から理解する必要に迫られている。このアメリカ・ヨーロッパの文化は深層においては「キリスト教文化」との関わりなしには理解できない。

したがってカリキュラム編成もこのような基本理念に基づいており、アメリカ・ヨーロッパ文化をその深層から理解するために、文化研においては、アメリカ・ヨーロッパ文化学をキリスト教文化学との関連において捉え、またその視点から研究する。またそのツールとしての英語コミュニケーションを身に付けることも欠かせない。文化研究の視点として、キリスト教文化的コンテクストに目を向け、アメリカ文化学においては、アメリカ宗教史とアメリカ文化史との関連づけ、その法的基盤として教会と国家との関係のキリスト教的由来に着目し、アメリカの現代思想の理解、キリスト教教育思想を探究することへと視野を広げる。ヨーロッパ文化学においては、ヨーロッパ文化をそのキリスト教思想史的背景において捉え、人間学を媒介として理解を深め、ヨーロッパ内の文化の多様性を見極め、その文化状況の神学的認識への視野を開くことを可能にする。さらに英語コミュニケーションでは、国際化、情報化の進む現代社会において、国際語としての英語の重要性が急激に高まりつつあり、アメリカやヨーロッパの文化を研究する上でも、また今日のグローバル化する国際社会に貢献できる視野と異文化理解能力を高めるためにも、英語という言語コミュニケーション能力は不可欠となっている。このようにしてアメリカ・ヨーロッパ文化の深みからの基礎的理解を与え、テュートリアルな指導、演習の重視によって、新しい時代の国際局面の場で働くにふさわしい主体的な実力を与えることを目指している。

第1章

大学院研究科の使命および目的・教育目標

文化研は、博士前期課程においてキリスト教文化理解の基礎となる諸科目を履修することにより、深く新しいアメリカ・ヨーロッパ文化の理解をもつジェネラリストの育成としての教育的役割を果たすことができる。具体的に、以下のような人材養成目標を目指して、この教育目的の達成につとめている。

- ① ジェネラリストとして、グローバリゼーションの理念に基づき、自治体、民間レベルの文化交流・国際的業務に携わる人材の育成。
- ② アメリカ・ヨーロッパ文化を深く理解し、あらゆる分野で国際的信頼関係に基づいた活動ができる人材の育成。
- ③ 語学力とともに、国際的な価値観・センスを身につけた人材の育成。
- ④ 深く新しいアメリカ・ヨーロッパ文化教育に携わる人材の育成。(特に高校教師の再教育)

博士後期課程においては、博士前期課程の教育目的の豊かな成果の上に立って、文化研の理念と目的を実現させる。すなわち、聖学院大学はプロテスタンティズムの伝統を自覚的に受け継いでいるが、それゆえに文化研博士後期課程では、総合研究所とともに、特にモダナイゼーションとプロテスタンティズムとの関係に注目し、この方面での研究教育に貢献する。開設以来5年目にして、課程博士5名、論文博士1名の学位を授与して研究者の養成につとめ、総合研究所とともに、この分野の研究センターとしての役割を果たしつつあると言える。

【点検・評価】

文化研は博士前期課程、博士後期課程共に設置の理念に基づいた教育・研究がなされていると評価できる。博士前期課程では、グローバリゼーションの理念を理解したジェネラリストとして、またアメリカ・ヨーロッパ文化を文化の深層から理解し、語学力とともに国際的な価値観・センスを身につけた人材として、様々な分野で活躍し始めている。さらにこれらの分野の研究者を目指して、博士後期課程へ進学する者も多い。

授業においては、教員・学生比率がほぼ1対1であり、教員1名、学生1名という講義もある。チュートリアルな教育・研究を実現できる環境を整備している。次に、海外から研究者を招聘し、大学院学生に講義を依頼することにより、最新の研究情報の提供を受けている。例えば、2000年度からは独ミュンヘン大学フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ教授に客員教授として隔年の「海外研究者講義」を担当し、さらに2003年度からは独テュービンゲン大学クリストフ・シュヴェーベル教授も隔年で「海外研究者特別授業」を担当している。このように海外の研究者との交流が非常に活発に行われていることは十分に評価できることと考える。

博士後期課程では、教員による研究指導の他に、総合研究所の各種共同研究プロジェクトへの参画や国際シンポジウムへの積極的な出席を通して、多面的な研究活動の支えが可能となっている。また、博士前期課程で述べた「海外研究者講義」「海外研究者特別授業」における主要な授業対象者として、日本にいながらにして海外の最新の研究情

報に触れる機会が多い。このような研究と教育の成果は、完成年度以降3年間で課程博士5名の学位を授与したことで示されているであろう（参考：p.413本文中の表）。

【課題・方策】 文化研の今後の課題は、大学学部（人文学部）から大学院博士前期課程、さらに博士後期課程へと繋がる教育の連携を強めることにある。聖学院大学の理念・目的に沿った人材の育成に関して、学部教育と大学院教育の一貫性と連携が欠かせない。そのために、優秀かつ意欲的な学部学生の大学院授業への出席を可能にするカリキュラム設計や科目開設を行ってきた。また、学部教員の大学院授業科目担当を進めてきた。これらは未だ途上にあるものとして、今後一層の体制作りを推進して行かねばならない。そのためにも、総合研究所を媒介として、学部および大学院教員の積極的な研究活動を展開することが今後の課題となる。

3 人間福祉学研究科の理念・教育目標

(A:大学院研究科の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成等の目的の適切性)

(B:大学院研究科の理念・目的とそれに伴う人材養成等の目的の達成状況)

【現状の説明】 2006年度4月、聖学院大学人間福祉学部人間福祉学科を基礎とした人間福祉学研究科（以下、本章においては「福祉研」という。）修士課程を設立した。2006年度の入学者は定員10名に対して、14名であった。

福祉研は、人間学的基礎におけるソーシャルワーク論をコアとし、①心のケア、②発達支援、③社会福祉（特に高齢者福祉）、④保健・医療・福祉政策、というコアを含め五つの柱からなる研究対象と取り組む。「少子高齢社会」という現代の必要に応じて、人間学的基礎の上に「福祉文化」の形成を担いうる精神ある専門人、「福祉人」の教育とその研究を大学院で目指す。

【点検・評価】 福祉研の目的として、まず人間学的基礎の上に社会福祉分野におけるケア提供者の質的向上をはかるためソーシャルワーク論等の教育研究を推進することである。これをコア目的として、第一に心のケアの指導ができる実務者の養成と普及を図ること、第二に発達・子育て支援に関する教育研究を推進し心理と福祉との境界領域の教育・研究を充実させること、第三に社会福祉分野において特に高齢者のケアの教育研修を図ること、第四に医療・福祉政策における管理学・政策学の教育研究を推進することである。

福祉研が取り組む各分野における人材養成の方向性は以下の通りである。

① 社会福祉分野におけるソーシャルワーク論の必要性と人材養成

ケアの制度や各種施設の整備は進みつつあるが、ケアに関係する人材の育成が遅れている。特に、高齢者のケアを担ういわゆるヘルパーや介護支援専門員は数的には充足されつつあるが、その質や位置づけや資質には多くの疑問がある。ケアの提供者および介護支援専門員は本質的にソーシャルワーカーであるべきであり、その指導者の養成が急